

鉄砲洲神社 論語素読 解説

(平成 23 年 12 月 9 日)

子罕 第九

16 子^し川^{かわ}の上^{ほとり}に在^ありて曰^{いわ}く、逝^ゆく者^{もの}は斯^かくの如^{ごと}きかな。昼^{ちゅう}夜^やを舍^あかずと。

孔子が川岸に立って述懐をしている。水が滔々と流れていて昼夜をおかず休まず流れていく。川の水が流れているのを見ながら、自分が不遇の内に歳をとってゆくのを、自分自身の一生を振り返って慨嘆をしているところです。

17 子曰^{しいわ}く、吾^{われ}未^{いま}だ徳^{とく}を好^{この}むこと、色^{いろ}を好^{この}むが如^{ごと}くなる者^{もの}を見^みざるなり。

孔子が言うには、女性を愛するように、徳のある人を愛する人など見た事がない。女性を好むというのは本氣になって愛する事が多いけれども、徳を兼ね備えている人を愛するというのは難しい。言葉で幾らそう言っても表面的なものでしかないと受けとめて下さい。

先日、映画『孔子の教え』を見たと申しましたが、「色を好むが如くなる者を見ざるなり」を衛の靈公・南子夫人で学者が説明をしていたので御紹介します。

衛の靈公が南子夫人の機嫌を取ろうと思い、自分の馬車に南子を乗せて、「孔子を我が手中に収めて家来にした」とほのめかして、後ろのお付きの車に孔子を乗せ、自分は凄いだらうと南子夫人に自慢をしていた。孔子はちょっと臍が横に向いたけれども大人しく、しぶしぶお伴をしたというエピソードが論語ではない別の資料に載っています。

衛の靈公のお伴をさせられたという屈辱感からこのような科白が出てきたという学者の説明がありました。

たまたま渋沢栄一の論語講義を見ていましたら、「色」を「利」に入れ替えて解釈をしていました。渋沢栄一が 85 歳の時ですが、老若男女問わず昼夜を問わず金儲けの相談をしに来る人が多かったので、「明治の御世の人は、色を好むより利を好む人間の方が、はるかに多いのでは」と論語講義で解釈しておりました。

お金があれば何でも買えると云う風潮は現代でもありますが、色々な学者が 2050 年頃ぐらいに通貨戦争が広まり、エネルギーが枯渇するのでは...とそれぞれの立場で唱えています。もしかすると 2050 年頃ぐらいから、お金で物を買う時代が終わるのではないかと云う、かなり？マークを付けながら色々な人が言っています。

18 子曰^{しいわ}く、譬^{たと}えば山^{やま}を為^{つく}るが如^{いま}し。今^{いま}だ成^ならざること一^{いっ}簣^きなるも、止^やむは吾^わが止^やむなり。譬^{たと}えば、地^ちを平^{たい}らかにするが如^{ごと}し、一^{いっ}簣^きを覆^{くつがえ}すと雖^{いえど}も進^{すす}むは吾^わが往^ゆくなり。

学者が一生懸命に勉強をしているけれども、学問を途中で止めてしまうと、今までの修行が無駄になってしまう。

「九仞の功一簣に虧く」という諺があります。その諺をベースにしていると感じます。

平地に山をつくらうと思えば、もっこに土を入れて運び、少しずつ積み重ねて山をつくっていくけれども、途中でつくるのを止めてしまうのは、自分の心で止めようと思って止めてしまうものなのだ。例えば、始めて山をつくるものが平地で土を盛り始めるようなものなので、努力はずっと継続していかないといけない。進んで山をつくるのは強制ではなく自分で進めていく。

山をつくらうと思うのは自分の意志でもっこに土を盛って運んで、最後まで盛り続けないと山はつくとれないと云う話です。